【寄稿】

人間の自立を支援することの本質を考える

岩　本　友　規

1．はじめに

人間の自立を支援するということを考えた場合、社会において効率良くその目的を達成するためのシステムを設計するにあたり、まずは人間の原理・本質を理解する必要があると考える。現在世間一般に知られている範囲において、これを一度整理してみたい。そのうえで、そこに提示された人間の原理・本質に沿った社会のあり方を検討していく。

2．個としての多細胞生物の本質

約10億年前、地球環境の変化に適応するため、微生物が利他の精神をもって共生し真核細胞となった。真核細胞は同じく利他の精神をもって複数の細胞を迎え入れて共同体を作り、多細胞体となった。こうした環境適応を目的にした利他性のもと、多細胞体の安定のために犠牲にした遺伝子組み換えのメリットを担保するための機能が、性の誕生であり「自己」の起源と言われている。

このとき、本質として考えて差支えないと思われることが２つある。ひとつには、利他性と自他の区別というものは、「意識」つまり「脳による周囲の環境のシミュレーションのモニタリング」機能ができあがるはるか以前からの根本的な原理として、私たち多細胞生物に組み込まれている普遍的な性質であること。そしてもうひとつは、多細胞生物の根本的な設計思想として、常に環境適応のために「他の存在」の示す価値を自己が受け入れやすいように、物理的外部に対しても開かれた系にしておく、という性質が太古の昔から脈々と受け継がれている可能性である。このことは精神分析学でしばしば言われる「他者による自己形成」というアプローチを支持する理由でもある。

3．社会的動物としての人間の本質

約600万年前、おそらく環境要因で大木が疎らな地域に進出せざるを得なくなった類人猿は、捕食の危険を少しでも回避するために集団生活を始めた。一方でそのメリットと引き換えに、食料問題やテリトリー争いといったようなデメリットも生じてきた。やむなく発生したストレスを緩和し社会生活を維持するため、エンドルフィンや他の神経伝達物質、オキシトシンなどの脳内ホルモンの仕組みをこのときから使いはじめたようだ。はじめは毛づくろいという１対１の関係から始まった神経伝達物質生成のトリガーは、知能の発達により会話や歌、踊り、音楽といった１対多、多対多の関係を可能にし、この神経伝達物質生成の効率向上が、社会集団の大きさを規定する一因となった。毛づくろいをする対象や社会的な同盟を規定する「近しい感情や存在」という社会的認知のメカニズムと、ストレス緩和のための生物学的物質の生成の前後関係は私の知る限り定かではな

Yuki Iwamoto : 大人の生き方研究所H ライフラボ

い。しかしコミュニケーションのための「社会的認知」と、「ストレス緩和のための神経伝達物質の生成」というメカニズムは、進化の過程で必然的に生物学的機能として人間に備わったものであるといえる。こうして多細胞生物が複雑な進化を遂げ、約20万年前に人類の祖先が生まれるまでに、同じように環境適応と利他の原理を背景に、個体と個体の関係性、つまり社会性が発達した。ここで改めてフォーカスしておくべきことは以下のことだ。人間が社会的であるとき、必然的にストレスフルであるが、それを緩和し社会集団を維持するための生物学的機能を「他者とコミュニケーションする」ことに埋め込んでいるということである。

4．現在の社会システムの問題

以上で見てきた人間の本質をベースとして考えて環境を設計すれば、自立も含めた人間として必然的に必要な機能は自然に発達する、というのが筆者の基本的な立場である。文化・文明は文字や話し言葉の発明で加速度的に進化したが、人間は20万年前からほとんど変化していないと言われているからである。

ではこの視点で見た場合に現代の社会システムはどう見えるであろうか。産業革命以降、主に資本家の需要に応える形での均質な労働者の供給という目的で、学校や会社という制度が発明された。この制度は産業文明にとって一定の成果を上げ、科学技術の発展にも大いに寄与した。しかし学校は技術的なことの勉強には有益であるが、同年代の子どもを集団にまとめておき、その集団に対して一律に何かを教え、育てるというスタイルは、人間という生物には想定されていないように思われる。「子供は自分の周囲で行われる生理的、情緒的、知的活動によって、容易に自分のそうしたものを形成する。同年齢の子供たちから学ぶことはほとんどない」（Carrel, A. 1935 渡辺訳 1994）のである。同様に、現在は「社会の諸機構でも個性を無視することで、大人の委縮が起こっている」（Carrel, A. 1935 渡辺訳 1994）といえる。つまり、産業文明の発展にウエイトを置き過ぎた社会設計をしているため、人間がそれぞれ備えている個性を効果的に発現できていない可能性が高い。結果的に、多様な人間とのコミュニケーションが代を重ねるごとにどの場所でも生まれにくくなり、社会全体としてストレスは蓄積していくことになる。

5．自立を促す人間的な社会システムの構築

学校と会社という産業文明の発展に有益なシステムを活かしながら、より人間的な社会を実現するためにはどんなことが考えられるだろうか。解決すべき課題として、まず心身の発達に重要な役割を果たす幼少期から青年期までを学校という閉じた世界に閉じ込められているため、新たに自立した他者と出会い、日々頻繁にコミュニケーションを取るための多様な大人と接触する機会が圧倒的に足りない。そして社会に出たあとも、「会社」と「家庭」いう非常に限られたヒト環境で長期間過ごすことにより、人間的な発達の機会が妨げられている。コミュニケーションのあり方も限定的となり、ストレスを緩和するメカニズムが働かないことにもなる。結果的に、人格の成熟のないまま中高年を迎え、慢性的にストレス体質となり、平成20年の内閣府統計『平成 20 年版国民生活白書』（図表 1-3-5）にもある通り、主観的幸福感が加齢と共に低下していく要因になっていると思われる。

これらの課題を解決するためには、もっと日常的に学校、会社や家庭の外で自然に他者とコミュニケーションできる新しいヒト環境の創出と、それを積極的に活用できるようになるシステム構築の両輪が必要である。環境だけ増えても広く活用されなければ意味がないし、外に出ていく意思があっても適切な場がなければ何もはじまらないからだ。新しい場の創出については昨今かなり進んできているように見えるが、まだまだ数・利用率ともに足りない。その質に関しても、もっと大人

と子供が入り混じって楽しめる場を増やしていくべきである。さらに、積極的にそうした場を活用できるシステムに関してはほぼ存在しないといっていい。2020年の大学受験制度変更による主体性を育む教育の重要度向上や働き方改革をきっかけに、家庭、学校・会社に続く第3、第4の場の活用圧力が高まることを期待している。これらの2軸の要素の発展を進めていくことが、今日の状況下では最上の自立支援となるはずである。

6．多様なヒト環境がもたらす自立、安息と幸せ

前にも述べた通り、精神分析学のアプローチでは自己は多様な他者との交流により他者と同一化し、または同一化しないという選択などをしながら人格を成熟させ、自立していく。これは人間を周囲の環境に適応する生物として捉えたときには、まさにあるべき存在・成長の形である。多様な他者、特に成熟した他者との交流は、私の実感からも間違いなく人格の成熟や自立に必要な要素のうちのひとつのはずだ。そして多様な他者との交流はストレス緩和のための神経伝達物質の生成を促し、社会での諸活動の疲れを癒し、新たな交流と社会活動への活力を生む。このポジティブなサイクルを実現したからこそ、人間はここまで生きのびてきた。近年の研究でも、親密な他者との社会的つながりが多様であることと、その人との接触頻度が高い人は主観的幸福度が高い、という結果が出ているが、他にも利他心や自己統制心など「幸福度が高い人の特徴」といわれるものは「自立した・人格の成熟した人の特徴」と言い換えることができることが多い。つまり、人間は人間らしく多様なヒト環境のもとで自立して生きられれば、必然的に幸せになる生物なのである。

【文献】

Carrel, A.（1935）: *Man, the Unknown*. Harper&Brpthers.（アレキシス・カレル. 渡辺 昇一（訳）（1994）. 人間 この未知なるもの.　三笠書房.）

Changizi, M.（2011）: *HARNESSED –How Language and Music Mimicked Nature and Transformed Ape to Man*. BenBella Books.（マーク・チャンギージー. 中山宥（訳）（2013）＜脳と文明＞の暗号 ―言語・音楽・サルからヒトへ. 講談社.）

Dunber, R.（2014）: *HUMAN EVOLUTION*. Penguin Books Ltd.（ロビン・ダンバー. 鍛原多惠子（訳）（2016）人類進化の謎を解き明かす.　インターシフト.）

前野隆司（2013）: 幸せのメカニズム 実践・幸福学入門. 講談社現代新書.

真木悠介（2008）: 自我の起源 愛とエゴイズムの動物社会学. 岩波現代文庫.

内閣府（2008）: 第1章 消費者市民社会に向けた消費者・生活者の役割と課題 第3節　社会の主体としての消費者・生活者～幸福の探求 平成20年度版　国民生活白書−ゆとりと成熟した社会構築に向けて−. 内閣府, 57-71.

Storr, A.（1960）: *The Integrity of the Personality*. Heinemann.（A. ストー. 山口泰司（訳）（1992）人格の成熟. 同時代ライブラリー.）